

病牀雜記

芥川龍之介



一、病中閑なるを幸ひ、諸雜誌の小説を十五篇ばかり読む。滝井君の「ゲテモノ」同君の作中にても一頭地を抜ける出来栄えなり。親父にも、倅にも、風景にも、朴にして雅を破らざることを、もろこしの餅の如き味はひありと言ふべし。その手際の鮮かなるは恐らくは九月小説中の第一ならん乎。

二、里見君の「蚊遣り」も亦十月小説中の白眉なり。唯聊か末段に至つて落筆匆匆の憾みあらん乎。他は人情のか何か知らねど、不相愛巧手の名に背かずと言ふべし。

三、旅に病めることは珍らしからず。(今度も軽井沢の寐冷えを持ち越せるなり。)但し最も苦しかりしは丁度支那へ渡らんとせる前、下の関の宿屋に倒れし時ならん。この時も高が風邪なれど、東京、大阪、下の関と三度目のぶり返しなれば、存外熱も容易には下らず、おまけに手足にはピリン疹を生じたれば、女中などは少くとも梅毒患者位には思ひしなるべし。彼等の一人、僕を憐んで曰、「注射でもなすつたら、よろしうございませうに。」

東雲の煤ふる中や下の関

四、彼は昨日「小咄文学」を罵り、今日恬然として「コント文学」を作る。宜なるかな。彼の健康なるや。

五、小穴隆一、軽井沢の宿屋にて飯を食ふこと五碗の後女中の前に小皿を出し、「これに飯を少し」と言へば、佐佐木茂索、「まだ食ふ氣か」と言ふ。「ううん、手紙の封をするのだ」と言へど、茂索、中承知せず「あとでそつと食ふ氣だらう」と言ふ。隆一、慚然として、「ぢや大和糊にするわ」と言へば、茂索、愈承知せず、「ははあ、糊でも舐める氣だな。」

六、それから又玉突き場に遊びあたるに、一人の年少紳士あり。僕等の仲間に入れてくれと言ふ。彼の僕等に対するや、未だ嘗「ます」と言ふ語尾を使はず、「そら、そこを厚く中てるんだ」などと命令すること屢なり。然れどもワン・ピイスを一着したる佐佐木夫人に対するや、慇懃に礼を施して曰、「あなたはソオシアル・ダンスをおやりですか？」佐佐木夫人の良人即ち佐佐木茂索、「あいつは一体何ものかね」と言へば、何度も玉に負けたる隆一、言下

に正体を道破して曰、「小金をためた玉ボオイだらう。」

七、軽井沢に芭蕉の句碑あり。「馬をさへながむる雪のあしたかな」の句を刻す。これは甲子吟行中の句なれば、名古屋あたりの作なるべし。それを何ゆゑに刻したるにや。因に言ふ、追分には「吹き飛ばす石は浅間の野分かな」の句碑あるよし。

八、軽井沢の或骨董屋の英語、——「ジス・キリノ（桐の）・ボツクス・イズ・ベリイ・ナイス。」

九、室生犀屋、碓氷山上よりつらなる妙義の崔嵬たるを望んで曰、「妙義山と言ふ山は生姜に似てゐるね。」

十、十項だけ書かんと思ひしも熱出でてペンを続けること能はず。

（大正十四年十月）

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
1971（昭和 46）年 6 月 5 日初版第 1 刷発行
1979（昭和 54）年 4 月 10 日初版第 11 刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007 年 6 月 26 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。